



書評

[評者]

倉原 優

国立病院機構近畿中央呼吸器センター呼吸器内科

レジデントのための 専門科コンサルテーション

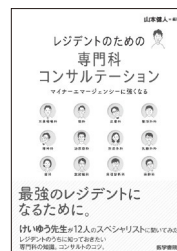
マイナーエマージェンシーに強くなる

山本 健人 編著

●A5 頁264 2021年10月

定価：3,960円（本体3,600円＋税10%）

[ISBN978-4-260-04680-0] 医学書院刊



若手医師に限った話ではないが、臨床医を続ける以上「専門科にコンサルトすること」と「患者に病状説明すること」は避けて通れない。その技術は、一朝一夕で身につくものではなく、他の医療従事者や多くの患者と真っ向からぶつかり合い、削られ、磨かれ、叩かれ、鉄は強くなる。不幸にも、コンサルトや病状説明が不得手な指導医のもとで育ってしまうと、自身も苦手意識をもってしまい、後輩にノウハウと伝えられないという負の循環が生まれかねない。うまく叩かれなければ、鉄はただの鉄のままだ。

医師が独り立ちするころ、コンサルトや病状説明に関して、誰しも己の能力不足を痛感するだろう。この書籍を読んだときに、「放射線科」「麻酔科」「病理診断科」が入ってくるとは予想していなかった。ともすれば「doctor's doctor」と呼ばれるこれらの診療科は、依頼さえすれば、あとはどうにかやってくれると誤解されがちな診療科でもある。とりわけ電子カルテが台頭している現代、以前のように顔を突き合わせて議論百出されることが減っているように思う。臨床情報なくしては議論すらできないし、著者が書かれているように、じかに顔を見て話さないといけない部分はあると思う。これは自分への戒めでもある。

この本の真骨頂は、「研修医が身につけた

いコンサルトのテクニック」という冒頭わずか17ページにある。ここに書かれてあるのは、コンサルトのお作法である。その価値基準がずれてしまっていると、修正されることなく一生を過ごすことになる。「この医師にはコンサルトしたくない」と若手医師に思われないうえにも、自分のコンサルトスタイルをここで見直していただきたい。

忙しい急性期の診療科では、どちらかといえばこういったノンバーバルな技術は「見て盗め」という風潮があるように思う。私も研修医時代にそういった科をスーパーローテートしたことがあるが、そもそも盗む方法などわからず、見よう見まねでいざ実践しようにも、“盗んだバイク”が走らないということは往々にしてあった。若手医師が見て盗むためには、指導医に見せる技術も問われる。屋根瓦式に若手医師にこれを受け継いでもらう好循環を生むためには、苦勞したであろう中堅医師が書いたコンサルテーションスキルの書籍が望まれていた。経験すべき苦勞は買ってでもすべきである。しかし、経験しなくてよい苦勞などないほうがよいのだ。この書籍が自分の研修医時代にあれば、どれほどよかっただろう。

なお、唐突に尾崎豊の歌詞のフレーズを出したが、著者を交えた医学書院のWebセミナーでこの比喻を出したためであることを付け加えておく。